

**518** 心筋ファントム実験による診断能からみた投与量・  
撮像時間の最適化-医療放射線被曝合理的低減のために-  
中村元俊<sup>1</sup>, 古賀佑彦<sup>1</sup>, 西村哲浩<sup>2</sup>, 近藤 武<sup>3</sup>, 安野泰史<sup>3</sup>,  
立木秀一<sup>3</sup>, 江尻和隆<sup>3</sup>, 前田壽登<sup>3</sup>, 外山 宏<sup>1</sup>, 竹内 昭<sup>3</sup>  
(藤田保健衛生大学 医放<sup>1</sup>, 病院放<sup>2</sup>, 衛放技<sup>3</sup>)

心筋ファントムを用いて診断能からみた核種投与量・  
撮像時間の最適化について検討した。京都科学社製心  
筋ファントムにプラスチックで4種類の欠損パターンを  
作り、9.69 MBqの<sup>201</sup>Tlを注入して前後方向のブレンダー  
像を撮像した。ダイナミック撮像の方法で8段階の撮像  
時間の画像を得、10名の放射線科医により欠損部位の診  
断を行った。投与量を加味した時間を横軸に、正診率を  
縦軸にとり検討した。正診率は撮像時間とともに上昇  
が認められ、この曲線は約2-3分でプラトーに達し、こ  
れが最適の撮像時間と考えられた。各施設でこの最適  
化を行えば患者被曝を合理的に低減できると考えられた。